

一九五九年、この年は地方自治体の首長並びに議会議員の統一地方選挙の年である。近頃の選挙は、半年いや一年も前から運動が行われ法網をくぐって饗応、買収が盛んである。立候補届出の日には既に当落が予想できるとさえ言われるご時世である。私の住む穂波町も、四月に町長及び議会議員の改選が行われる。町全体の人口は炭坑の斜陽化で幾分減ったとは言え、まだ四万を保っている。炭坑華やかなりし頃は、人口四万三千を数える大世帯であった。それだけに炭坑出身の議員が大半を占め町行政も炭坑の鼻息を伺って行われて来た。その情性は今猶続いている。当時、私は秋松部落の公民館長（部落長）と駐在員（地域によっては連絡員と呼ぶ、役場の囁託である。）を担当し、職業としては、二市十一ヶ町村の鉱害被害者組合連合会の事務局長をしていた。正確な記憶は薄れたが、年が明けてから、部落の顔役の来訪があり、四月の選挙に立候補するようすゝめられた。この部落には二期つとめる現職の議員Hが居り、しかもその人は私の家の隣りである。私宅を訪れた顔役の言葉に依れば、Hは今年の選挙には出ないと声明しているとのことである。然し、私は信じられなかった。H氏宅では、部落の人々をちょいちょい接待しているし、再出馬をそ

れとなくほのめかす節もある。私はその気配を顔役に話してみたら、彼等は私の言うことを、頑として受入れず、「Hは町の上水道条例作成のとき、住民の、殊に鉱害被害者である農民の既得権を侵害し、炭坑側に同調し、地域住民を不利にした。その為我々に顔向けならず、たとえ又議員に立候補しても部落は押さない。」と言いつけるのである。私は二三日回答を保留させてもらうことにし、翌日、博多に出て、副島、井原とも話合った。両者の意見として「地方議員でも権力の座には違いないが、生活費稼ぎでいいじゃないか、部落の要望に添うべきだろう。一つ、県会にも候補者を立てて政治屋共の悪口をしゃべってあるるか。」と言うことで、早急に小山一弥を佐賀県選に立てることにきめ、アナキスト連盟九州地協は、二人の立候補をみとめたのである。地協の了解を得た私は、部落の人々に、立候補を引受ける旨伝え、準備態制に入った。何しろ、秋松部落の有権者が全部固まっても当選数に満たない。最低四五〇票から五百票確保せねば、当選は覚束ないのに、秋松の有権者総数は三七〇である。その中、Hが百五十は取る。その外に他部落より立候補する者の縁者の票が二〇票はある。どんなに顔役が部落を固めても、私への確票は二百票とふまざるを得ぬ。大半を、他部落から確保する必要があった。私は毎日毎日、

足を棒にして、知人縁者を訪ねまわった。そして、最下位で当選したが、隣家のHは私と一票の差で落選であった。仕方のないとは言え、後味の悪いものだった。

佐賀県選の小山一弥は、没収覚悟の上であった供託金を、取られるどころか、も少し票があれば当選出来るというところまで行った。最初からその気はなかったとは言うものゝ残念だった。然し、副島、井原、小山のトリオで、あれだけ政治屋の悪態を並べ立てたにも拘らず、小山の得票が多かったことは、井原や副島という佐賀県名門出身者の応援があったにしろ、世の中には、これ程政治不信をいだいている人のあることを、実証したことであった。

一年議員というものは、何を発言しても、古参には相

松本健一氏へー思想とは何か？

週刊「読書人」2月5日付のA伝統的アナキズムへの照射Vを拝見して、非常に明快な一文で、示唆される箇所が多々あるにもかゝらず、何かが欠けていると考へ、この文を草しはじめました。勿論、貴方とは一面識の間柄で、昨年12月第3木曜日、A近代学校Vの会合で討論した経験があります。ですからこの文は、単にマスコミ

手にされず、あばれゝばあばれる程、ツンボ機敷に追い込まれることは、町村議会も国会並みである。私としては、氣力に於て劣るところはなかったが、四年間に出来た事と言えば、コネで特定の業者だけが利益を得る仕来りであった、公共物資の調達を、町内商店なら、どこでも役場に品物を納めることが出来るように、したぐらいのことである。二期目は、健康もすぐれず金もなく氣も進まなかったが、応援者の熱意におされて断り切れず立候補した。言うまでもなく、出足もおそかったせいで落選した。選挙というものを経験してから、知りつくしていたはずの人の世の裏、表を、改めて見直す思いであった。よい勉強をしたと思う。

つづく

はしもと・よしはる

の周辺を歩く人が、たまたま発言したアナキズムに対するアナキズム研究者のやっかみ半分のたわ言だとか、アナキズム擁護の検察官のつもりで書くのではなく、思想とは何か？思想がある国の民衆に根づくとはどういうことか等、つまりお互いの研究途上での、相互研鑽に資するが目的だと申しあげておきます。

さてあの例会の席上、私達の間で問題になったのは、貴方が△権藤成卿は日本のアナキズムの右派に位置すると考えてよいか▽との質問でした。幸い私は黒戦社版の「自治民権」を読んでいたもので、その感想を話しました。私は先づ、アナキズムにおいて、何故右派だ左派だと位置づけるのか判らない。アナキズムは種々の個性を認めるのが前提だから、殊更に流派を作るには及ばないと発言したものです。その心は貴方の言外に、△近代主義的系譜▽としての幸徳から大杉へつなぐ線を左派とし、権藤、北一輝をつなぐ線を右派とする動きが読みとれたからでした。また貴方はあの席で△日本のアナキズムはどうなっているのか▽と発言しました。その時、私の隣りにいた大阪・釜ヶ崎の労働者君が「日本のアナキズムがどうであろうと、知っちゃいない。問題はテメエのアナキズムはどうなんだ、というのが重要だ」と答えたのです。貴方は確かにあの時愕然として、言葉少なになつたものでした。彼の釜ヶ崎君はとつとつと「俺のやっているアナキズム、俺のやりたいアナキズム」を語って呉れ、私は自分なりに共感を覚えたものです。しかし今度発表された一文をみると、あの時の貴方の驚愕は貴方の精神の働きの何の痕跡もとゞめず、自分の論理に合う資料だけルボされたと思われ

ません。

例えば、△毛沢東の中国がアナキズム的方向にすすんでいるとして、その理由を中国にはかねてより権力嫌いの土壤があるからだ、逆に日本には権力追隨の土壤があるのだと主張している▽と書いてありますが、これは曲解なのです。前半は私の発言から採集されたかと思えますが、私は△毛沢東の中国がアナキズム的方向にすすんでいる▽とは断言していません。そうなければいいのですが言った事柄の大意は、毛沢東の中国にはアナキズム的なものが見られると言ひ、裸足の医者事例をあげたままです。これに照応する思想として、クロボトキンの肉体労働と頭脳労働の綜合を念頭にもつていてあの発言になつたのです。また例文にあげられている権力嫌いと権力追隨の土壤についての発言は別人からとつて居られる。しかし、これとてわれわれの常識であつて、発言者は別の日の会合では戦時中反戦活動をしたウオッチタワ運動の抵抗者の話や隠れキリシタンについて発言しているのです。ですから日本は権力追隨者ばかりだと当人が理解している訳ではないでしょう。つまり貴方の誤解にしか過ぎないのです、ですから△これが少なくともアナキストを自称するもの言であるか▽とお叱りを蒙つても「判っちゃいないんだなあ」としか返答できません。判つ

ていないのはお叱りの後につづく文章です。△ロシアにナロードというアナキズム醸成の基盤があり、日本にはそれが無いという論理が、ロシア国粹主義的であると同様、それは中国国粹主義的暴論である▽誰がこんな暴論を吐いたか知りませんが、日本にだつてナロード（民衆）はいる訳です、アナキズム醸成の基礎としてみるならば、実際のところ私は知識としての他はかような見方はとりません。△相対的にみて、つまり貴方のおっしゃる△ナシヨナリティ▽の違いや△国ごとに歴史的過程の違い▽からみて、ロシアのナロードの方が日本のナロードより多くのアナキズム的気分、思考方法をもっていると思ひます。

さておっしゃる事を要約すると…。

1. △日本のアナキズムはもっぱら「外来思想」として、わがくにのインテリゲンチヤに影響を与えた。

2. 思想が内発的契機によつて生まれたものでなく、外から与えられたものであれば、それはついに皮相なものである。根づく可能性はない。

もし外からの契機によつたものであるにしても、それが根づくためにはすでに内発的土壤をもつており、移植がその内発的土壤を掘りおこすような形であるならば根づきえよう。▽

一見至極くもつともなご意見で反応する余地はないかみえます。だがここで扱われている「思想」は思想史に転がっている思想のようです。貴方の文を使って作文してみます。

「日本の（民主主義）は、もっぱら「外来思想」として、わが国のインテリゲンチヤに影響を与えた（例えば民本主義者・吉野作造を見よ。私註）。（民主主義）が内発的契機によつて生まれたものでなく、外から与えられたものであれば、それはついに皮相なものである。根づく可能性はない。（そこで例えば現在の憲法は改正する必要はある・私註）（ただし）もし外からの契機によつたとしても、それが根づくためにはすでに内発的土壤をもつており、移植がその内発的土壤を掘りおこすような形であるならば根づきえよう（一体誰がその労をとりますか？私註）

勿論、民主主義の代りに資本主義、個人主義、社会主義、科学的共産主義、毛沢東主義等それぞれあてはまりますね。ということとは、貴方にとつて思想とは何かが問われる必要がある訳です。先にあげた釜ヶ崎君の言葉が生きているのはそこなのです。アナキズムを自己に選択した人は、すでに内発的にそれを生きようとしているのだ。自己の選択した思想に多くの人が共感して呉れればそれ

でよいのであって、現在ベトナムで民衆を苦しめているようなイデオロギーまたは権力闘争による陣取りはしなものです。つまり暴言を吐けば、アナキズムが日本の風土のユートピア思想の何に短絡しようとするかは俺の知ったことじゃない。従ってアナキズムが幸徳から大杉へつなぐ近代主義的系譜で論究される限り、その帰結は転向である；VかA農本主義（天皇制アナキズム）へと慕いよってゆくしかないVかどうか、——この論断は事実関係の追認であって、そこに参加した個々のアナキストの生きていた社会的状況、時代思想は意識的に無視して切捨ててある——私自身がやってみるとしか答えにならないでしょう。

全く、色々と気に障ること、酷いことを言ったかも知

暴力団を脅かした下足番

一九二〇（大正九年）一二月に設立された社会主義同盟は、はじめから分裂の芽を宿していた、といえはそれまでだが。当初は日本に革命近しの希望に燃えた歴史的なアナ・ボル共同戦線であった。設立までの数ヶ月間に準備協議会がしばしば持たれた。その準備会の通知状がたまたま、河本乾次に勤め先の星製薬に届いた。それを

正当づける為に、河本が工場内で発禁の出版物を密かに配っていたとか、ストを宣伝していたとか、デッチアゲの報告書を社長に提出していたのであった。

河本の職場はモルヒネの精製場で、世間では入手至難の高価な麻薬部であった。その氣になればいつでも持出す事はできた。それで、モルヒネ精製場の工員に対する人事係の監視はとくに厳しかった。まして、高価な麻薬を外に持出して社会運動の資金にされてはとの懸念と、社会運動者をモルヒネ部に入社させた人事係の責任とから、河本を誡首したのが本当の理由のようであった。

一方、準備協議会では歴史の大きさを流れの中で、社会主義同盟創立という画期的な仕事と取組んでおり、河本のような無名の青年の誡首を問題にしてはならなかった。彼は彼自身の手で問題を解決しなければならなかった。

この時、岩佐作太郎は「運動の蔭にはいつも犠牲が伴うものだ」と温く慰さめてくれた。また大杉栄は「忽ち生活に困るから、会社から解雇料を取ってやる事だ」と現実的を助言してくれた。河本は、もう工場の人事係ではラチがあかないので、じかに社長の星一と交渉すべく京橋ビルの本社に数日足を運んだ。然しその度に社長は台湾に出張中とか、ドイツ大使館に行ったとか、時の内務大臣後藤新平の官舎に行ったとかで、仲々会えな

れませんが、それは当方の押しかけ説法の無礼の故とお詫びして、貴方が今、「この伝統的アナキズムへのわけ入りの序にすぎなくなりました」と謙遜される所に着目し、敢てご考慮願うのですが、バクーニンとクロボトキンがロシア人であって、それぞれスイスとロンドンに滞在しながら、アナキズム思想を宣伝し、実行した。彼等に「貴方がたはロシア人のだから、ロシアのユートピア思想を掘り起こさなければアナキズムは思想として、根づかない」と言えるかどうか自己に訊ねて戴きたいものです。私はその代り、近代思想が土着の何々につながれるとどうして反動の様相を呈するのかドストエフスキのアナキズムに探ってみましょう。

萩原晋太郎

見た人事係は、社会運動に関係しているとの理由で、早速河本を誡首した。その頃の河本は社会運動には駆け出し時代で、準備会に出席しても先輩たちの協議を傍聴しているだけであった。時々宣伝演説会のピラマキやボスターリ貼りを手伝う位で、会社が危険視するような活動はしていなかった。後でわかった事だが、人事係は誡首を

つた。そして最後に、秘書から金一封の紙袋を渡された。百円札が数枚入っているかと思ったら、たった十円札五枚であった。

河本は生活が窮迫し、これ以上いつ掴まえられるかわからない社長を追ってはいられなくなった。やむをえず数日間職業紹介所に通ったが、これも徒労に終わった。それから浅草のある桂庵（私設口入屋）にとびこんだ。その周旋で浅草観音堂裏の、蝶々料理店の下足番になった。入店してから分ったのだが、店の経営者は当時の国粋会中で新撰組の役を果した悪名高い、反動団体「大和民労会」長の河合徳三郎であった。店の女将はその妾であった。大和民労会は「社会主義撲滅」をスローガンに演説会や集会等に日本刀をふるって殴りこみ、殺傷事件まで起している。河本は知らぬ事とはいえず、とんでもない所へ飛びこんだものだ、と、運命の悪戯に苦笑した。だが考えをおして、民労会の内部事情が分るだろうと、それを楽しみに神妙に下足番を勤めた。

それから数日して、河合が突然「下足番いるか」と慌ただしく大声でどなりながら、妾のいる帖場に足音荒く入って行った。もう俺の事がバレたか、河本は少し早すぎると思っただが、くるものがきたと覚悟は決っていた。河合は一室に河本を呼びこむと、四人の子分にとりか

こませた。河本を坐らせると、間に防壁の机を置き、三
mほど離れて河合は棒立ちになって対決した。河本が何
かの拍子に膝を少しでも前に崩すかニジリ寄るかすると
河合はその度にビックリしたように慌てて後ズサリする。
そして両手を前に遮ぎるように突出すと「前に寄るな
来るな」と血相を変えてどなった。まるで河本が飛出し
て危害でも加えるかと感違いしての警戒ぶりであった。

目の前には机があつて、とても飛びつく事はできない
のに、それほど身を守る敏感さは、暴力を商売にする彼
ら反動団体仲間の本能なのか、それとも実際は噂に反し
て肝ッ玉の小さい男だったのか。プロレスラーのような
巨漢で全身にホリモノをした大和民労会長の河合とは思
えなかつた。河合はワメイた。

「貴様は誰に頼まれて俺の寝首をかきにきた。大杉栄
か、堺利彦か。お前はどちらの子分か……」

この愚問には河合も一寸困つたが
「誰にも頼まれない。また誰の子分でもない。一度、
下足番をやりたかつただけ」

「ウンをつけ。かくしたつてダメだぞ。たしかに俺の
寝首をかきにきたのだ」

いしながら、話は急に意外な所に転じた。
「お前たちはバクダンを所持しているそりだが、その

バクタンはどこから手に入れたのだ」
なぜここで爆弾の話を出したのか、河本はその時は
気がつかなかつた。何とか調子を合せて事をなきに過すよ
り仕方がないと思ひ、根も葉もないデタラメをいかにも
尤もらしく言つた。

「バクタンは鉾山の入夫と連絡をとつてあつて、工事
用のダイナマイトを廻してもらひ事になつてゐる」

すると河合は我が意を得たりと、はじめてニッター気
味の悪い笑ひをした。誘導尋問にうまく引掛つて白状さ
せたというような、勝利感に見えた。話が終るなり、隣
の部屋に待機してゐた警視庁の特高係に、河本は引立て
られた。河合や子分たちが河本に暴力沙汰に出なかつた
のは、隣に特高がいたからであつた。

警視庁での取調べは寝耳に水だった。河合の寝首や民
労会への潜入問題などではなく、衆議院門前に爆弾を仕
掛けた事件の有力な容疑者としてであつた。それで河合
が爆弾の話を出した事が分つた。当時四二議会開院中
で、衆議院門前に爆弾が仕掛けられ、未発に終つた事件
があつた。懸賞金まで出て捜査したが、ついに犯人は捕
まらなかつた。その騒ぎの最中に、河本が星製菓職首後
忽然と姿をくらました事になり、容疑の目星にされたの
だ。

厳しい探索の末、下足番になつてゐる事がつきとめら
れた。これが河合の寝首をかきに潜入したと見られ、ま
た河合とのバクダン問答で、河本が爆弾事件を白状した
と見られた訳である。

その頃河本は毎日丹念に日記をつけていた事が幸いと
なり、押収された日記で裏付捜査がスラスラと行われた。
無論アリバイも完全で、彼は廿日間で釈放された。も
し日記がなかつたら、アリバイを証明する記憶がなく、
拷問されて爆弾犯人はデッチあげられていただろう。

これでこのナンセンスなドラマは呆気なく幕となつた。
彼は東京では就職先が見つからないので、大阪に戻り
南海電鉄の駅員となつて労働運動に挺身するようになる。

その後、時代は流れて大和民労会は解散し、河合は映
画会社河合プロダクションを作つてその社長に納つた。
河本は一度訪ねて行つて当時の事を冷やかにしてやろう
と思ひながら、河合も星も早く死去して、その機を永久
に失つたことを残念がっている。

以上は河本乾次氏から送られた手記「食ひ詰めて料理
店の下足番になつた話」によるものである。終りに同氏
の若かりし頃の年譜メモをかかげておこう。一ハギシン
大正8年(数え年二二才)

一月 上京

七月 川崎屋の労働問題演説会に行く
八月 東京各新聞社に大争議おこる。平民大学夏期講
習会の聴講生となる。労働組合研究会に出席す
る。星製菓工場に就職する。

大正9年(二三才)

五月 加藤一夫の自由人連盟に加入する

六月 北風会に始めて出席する

十一月 星製菓工場を解雇される

十二月 社会主義同盟創立大会

25日から1月15日迄三田郵便局臨時集配人

大正10年(二四才)

一月一七日 蝶々料理店の下足番になる

二月 二日 蝶々料理店から警視庁に引致される

三月 八日 大阪に帰る

三月二八日 南海電鉄の駅夫に就職する

大正13年(二七才)

五月 西部交通に加盟

五月 南海同志会結成

九月 南海電鉄を解雇される

向井孝君の「墓標のないアナキスト群像」続篇1、
 飴屋と車夫と金櫛屋という題で、桜井松太郎、野沢重吉、斉藤兼次郎をとり上げて、「現代の眼」の三月号に書いています。読む内に眼頭が熱くなるのは僕の老令の感傷だけではないはずだ。向井君は良いものを、すばらしく良く書いてくれた。僕はリベルテールの一月号の書評の中で「労働組合運動も、大杉が野沢重吉について書いたような所から出直さねばなるまい」と書いた。日本のアナキズムの運動が推進され、労働者庶民の間に浸透して行ったのは、向井君が書いてるように「何一つ報いを求めることなく、貧苦のはての窮死の生涯を、なお淡々として終っていった人たちの」、またひたすら運動に殉じつつ、いつしか力尽きて消えていった人たちがあつたからなのだ。そして石川さんも大杉も、こういう人たちと一緒に戦ったのだ。大杉がボルと手を切ったのは当然だ。その後で組合という組織の中ではサンジカリズムがどうの階級斗争がどうのと血迷って兄弟喧嘩を初めて自滅するようになった。こうしたことを、この人たちが見たら何というだろう。この人たちが知っていることは「働いても苦しい生活から抜けられない社会、正

直に生きていながら馬鹿を見ねばならない社会には大きな矛盾、不正があること」「この矛盾や不正を権力によって保護する政府、社会の革命は当然である」「そのために底辺で苦しんでいる階級が手を握り合い、助け合う以外に道はないこと」「したがって働らく者たちの解放は働らく者自身の力によること」「これが世界をつらぬく人間の正義であること」、これだけなのだ。僕が知っていることもこれだけだ。これを原点として、これに共鳴するから無政府主義者と言われる。裏長屋で「あれは良い人間だが社会主義者だから困る」と言われるが、何か起ると「矢張りあの人以外に頼める人はいない」ということになる。こうした人間同志の暗黙の誓が革命運動になって行った。暗黙の誓、それは自分自身の誓である。だからこそ「貧苦のはての窮死」にも満足するのだ。こうした原点を持ち込んでサンジカリズムをアナルコ・サンジカリズムにする。同志の中の知能や決断にすぐれた者があれば信頼し、服従して戦いもする。これは当然の分業であり、上下に階層化して支配と服従の関係になることを拒否する。社会に上下の階級や階層がある以上は階級闘争の語があるのは当然だが、組合活動自体が今

のように、階層的権力構造になってしまつたら、どうして働らく者が解放されるのか。

われわれは初期のアナキズムをささえたこの人たちが立った原点に帰らねばならない。この人たちはこうした原点に立って実践した。この実践は隣人や同志に対す

野火

☆二月十五日の「近代学校」では松本健一氏の「伝統的アナキズムへの照射」をめぐり、著者を招き討論する予定であった。しかし予測通り今回は松本氏が欠席し、集会者の意見の表明に終った。大方の意見では、氏の文は論駁するに値しない、会でのこれまでの話を誤解し、アナキズムについては何も判っちゃいない。売文のための文章であるなどの話がでた。松本氏は一売文業者で終らない為にも、また自分の吐いた意見の結果をみる意味でも招請に応じればよかつたのに……と惜まれる。発言者は三浦、塩、横倉、信太、はしもと。(文責ははしもと)

生活者 第10号、二月号

☆横浜寿町の生活館で働らいている加藤彰彦君(野本三吉君のこと)が出している月刊紙、同君の手記「大陽の伝説」は恐ろしい。東京の山谷、大阪の釜ヶ崎にならぶ

る善意と愛情によるもので理論ではなかった。理論は誤まることもあれば、ごまかしもある。変らないものは同志や隣人への誠意と愛でしかない。分裂させるような理論や偏見をふみ越えて進まねばならない。向井君がさらにさらにこれを書き続けてくれることを祈る。(三浦)

横浜の寿町での生々しい記録だ。読む度に深くえぐられるような気持ちになって堪えられない。「アナキストだなんて太え面して、えらそうなごたくをならべやがって一体何でえ、寿町でてめえも一緒に生活して見ろ」と言われているようだ。それでいて読まずにはいられない。加藤君。君はまともな人間らしい気持を持っているばかりに、こうしたものが書けるのだね。僕のアナキズムはいつでも、こうしたものにゆさぶられ続けて来たのだった。今もゆさぶられている。僕は葦だ。風にそよぐ葦だ。横浜市南区寿町3寿生活館、加藤彰彦(三浦)

無政府、一九七二年十二月三十一日号

広島アナキズム研究会発行(発行所住所不明)。ガリ版四ページ、ロシア革命とその知られざる背面、国際労働者協会とアナキストたち、友愛会と非友愛会の対立と

7 3 年 春 の 労 働 キ ャ ン プ

3 月 1 5 日

4 月 1 0 日

来春の彌栄之郷共同体での最初の労働キャンプ予定が上記のように決まりました。残雪のなかに、シイタケの植菌、鶏舎作り、耕運、溝堀り、タキギひろいの仕事が予定されています。夜には主に、近所の農民との交流、中国の共同体—人民公社についての学習をしたいと考えています。

キャンプ要項

※参加者持参品 作業衣(アノラック、長靴、手袋)、懐中電燈、筆記用具、洗面具、寝袋(又は毛布) 厳しい寒さが予想されますので、各自十分な防寒の用意をして下さい。 ※参加費用 食費1日300

円(米1日3合当りを持参した人は150円 ※詳しい問い合わせ、参加申し込みは 大阪市東成区玉津二丁目東成玉津郵便局留 備北百人委員会まで連絡下さい。キャンプ参加者のしおりをお送りします。



彌 栄 之 郷 共 同 体

島根県那賀郡彌栄村大字三里

いった内容である。健闘を祈る。(三浦)

方法的アナキズム研究会

関係の交革、認識論におけるレーニンの段階すなわち反映論についての原初的な批判および克服という論文は哲学的にマルクス・レーニン主義にせまるものである。マルクスやレーニンの哲学について知識を持たない私にも、ある程度理解はできる。社会科学と言え、すぐにマルクス・レーニン主義だと思ひこむくらいに、日本人の多くのものが、イビツになってしまっている実状を見ると、たしかにこうした鋭いそして真剣な論文が読まねばならないと思う。次号予告として、1.マルクス歴史主義の貧困、2.家族の共同性に関するエンゲルス、吉本隆明批判、が告示されている。福岡県飯塚市飯塚郵便局私書箱16号安田気付。

X

人間・野田欣三追悼号

野田さんにはいつも詩稿をいただいていた。はじめてお会いしたのは山鹿君をしのぶ会だった。その後バルカン社に入って乱雑だった室をすっかり整頓して、「仕事をするときには、このようにしなければ」と言い、具合が悪かった印刷機械を、いろいろ工夫して手を加えていら

れた。仕事に対する愛と心構えに頭を下げる私だった。間もなくバルカン社を去っても詩は続けていただいていた。亡くなられたとバルカン社を通じて聞いても、追いまくられていてお宅に伺うこともできずにいて、リベルテールに野田さんの詩を特集しようかと思っている内に西山さんの編集で、この人間の終刊号をいただいた。この終刊号で短かった交際で、受けた印象とその人柄をしのぶ。純情に生きた野田さんは本当に自由人だった、アナリストだった。折を得てリベルテールにその詩を特集したい。

3月1日
 3月10日
 3月15日
 3月20日
 3月25日
 4月1日
 4月5日
 4月10日
 4月15日
 4月20日
 4月25日
 5月1日
 5月5日
 5月10日
 5月15日
 5月20日
 5月25日
 6月1日
 6月5日
 6月10日
 6月15日
 6月20日
 6月25日
 7月1日
 7月5日
 7月10日
 7月15日
 7月20日
 7月25日
 8月1日
 8月5日
 8月10日
 8月15日
 8月20日
 8月25日
 9月1日
 9月5日
 9月10日
 9月15日
 9月20日
 9月25日
 10月1日
 10月5日
 10月10日
 10月15日
 10月20日
 10月25日
 11月1日
 11月5日
 11月10日
 11月15日
 11月20日
 11月25日
 12月1日
 12月5日
 12月10日
 12月15日
 12月20日
 12月25日



黒色戦線社
 大島英三郎
 大島英三郎

人類更生の大道、無政府主義研究書。送料当方もち

- | | | | | | |
|---------------|-------------------|--------------|------------------|---------------|--|
| 八太舟三著 | 純正無政府主義(農村社会革命講座) | 一五〇円 | 大杉・朴烈ら十二氏著 | 反逆者の牢獄手記 | 二〇〇円 |
| 階級闘争説の誤謬 | 一三〇円 | 和田久太郎著 | 獄窓から | 八〇〇円 | |
| 無政府主義人類解放の道 | 七〇〇円 | 古田大次郎著 | 死刑囚の思い出 | 七〇〇円 | |
| マラテスタ著 | 無政府主義組織論 | 一〇〇円 | 天皇制破壊への激動 | 七〇〇円 | |
| 農民の中へ | 農民の中へ | 二〇〇円 | 一・二皇居発煙筒事件 | 三〇〇円 | |
| 石川三四郎著 | マフノの農民運動 | 一五〇円 | 雑誌労働運動(大正十三年三月号) | 四〇〇円 | |
| 弁証法的唯物史観の批評 | 一五〇円 | 大杉栄・伊藤野枝・追憶号 | 漫文・漫画 | 五〇〇円 | |
| 進化と革命(ルクリュス著) | 一五〇円 | 権藤成卿著作集第一巻 | 自治民権 | 二〇〇円 | |
| 無政府主義とサンジカリズム | 一五〇円 | 黒色戦線社編集 | 難波大助大逆事件 | 九〇〇円 | |
| ペテルロー著 | 山鹿泰治訳 | 一五〇円 | タロポトキン著 | 麻生義訳 | 二五〇円 |
| 平民の権 | 無政府の福音 | 一五〇円 | 正義と道徳 | 金子ふみ子著 | 二〇〇円 |
| 岩佐太郎著 | 無政府主義者は答える | 一五〇円 | 近刊 | 付ふみ子歌集・大逆事件資料 | 二〇〇円 |
| 革命断想 | 日本無政府主義運動史 | 三五〇円 | 近刊 | 権藤成卿著作集 | 二農村自治論、3君民共治論、4自治民政理、5日本農制史談(発禁)、血盟団、五・一五、二・二六七の依にくるもの、パンフ等、6兩湖書、柳子新論、7八郷通聘攻、8日本震災凶魔攻、9問々子詩、10補遺 |
| 石川三四郎ほか三氏著 | 日本無政府主義運動史 | 第一編 | 近刊 | 黒色戦線社 | |

発行所 黒色戦線社
 〒三七二 群馬県伊勢崎市中和田 大島英三郎
 振替手都宮 一一〇一五 大島英三郎